新見公立短期大学紀要　第24巻
二四一～二五六頁、二〇〇三年

論稿

実久三次郎と名柄八丸―為朝伝説と大島征伐伝説をめぐって―

原田信之
（日本文学）

南西諸島各地には、源為朝の子孫とされる人物に関する伝説が複数伝承されている。本稿で扱う実久三次郎もそのうちの一人で、源為朝を父として、奄美諸島の加計呂麻島の実久地区で生まれたとされている。現在、実久地区には実久三次郎とその母ナベシリカナを祭る実久三次郎神社がある。その実久三次郎と力比べをしたという伝説がある名柄八丸は、奄美大島の宇検村名柄地区にいたという豪族で、琉球国尚清王による「第二回大島征伐」の際に討伐されたという伝承がある。現在、名柄地区には名柄八丸を祭る名柄八丸神社がある。本稿は、新たに採集した口承資料などの検討を通して、数百年の隔たりがあるにもかかわらず両者が力比べをしたという伝説が生じた背景を探るとともに伝説の全体像をまとめ、残存資料の少ない南西諸島の英雄伝説の一側面を考察した。

はじめに

南西諸島各地には、源為朝（一一三九～一一七〇）の子孫とされる人物に関する伝説が複数伝承されている。最も有名な人物としては、琉球国の舜天王統初代の舜天がいる。琉球の正史『中山世鑑』（一六五〇年成立）巻一「舜天御即位」の項には「舜天尊敦ト申奉ルハ、大日本人皇五十六代、清和天皇ノ孫、六孫王ヨリ七世ノ後胤、六条判官為義ノ八男、鎮西八郎為朝公ノ男子也」[1]と記されており、舜天は源為朝の子とされている。また、琉球国の察度王統初代察度（一三五〇～一三九五年在位）の父親奥間大親は羽衣伝説で有名であるが、奥間家には、奥間家の祖神の一人「真志喜五郎」は源為朝の子であったという伝承がある。[2]

本稿で扱う実久三次郎（さねくさんじろう）も、源為朝を父とすると

伝承されている人物の一人で、奄美諸島の加計呂麻島の実久地区で生まれたという。現在、実久地区には、実久三次郎を祭る実久三次郎神社がある。一方、奄美大島の宇検村名柄地区には、名柄八丸（ながらはちまる）という豪族がいたという伝承がある。この名柄八丸は、琉球国第二尚氏第四代尚清王（一五二七～一五五五年在位）による「第二回大島征伐」の際に討伐されたという伝承がある人物である。第二回大島征伐では、名柄八丸とともに、加計呂麻島のイキヨホノヒョウヤ・ヨミノチキヨという兄弟が討伐されたという。

興味深いことに、奄美大島各地には、源為朝の子とされる実久三次郎と名柄八丸が力比べをしたという伝説が伝承されている。両者の間には数百年の隔たりがあるため、直接二人が力比べをすることは不可能である。ではなぜ、このような伝説が生まれることになったのであろうか。

本稿は、新たに採集した口承資料などの検討を通して、実久三次郎と名柄八丸が力比べをしたという伝説が生じた背景を探るとともに、実久三次郎と名柄八丸をめぐる伝説の全体像をまとめ、残存資料の少ない南西諸島の英雄伝説の一側面を考察した。

一　源為朝と実久三次郎

幕末の嘉永三年（一八五〇）三月末から安政二年（一八五五）四月まで奄美大島に遠島されていた名越左源太が著した『南島雑話』には、為朝伝説に関する記述がみられる。源為朝が奄美に来たことについて、『南島雑話』には「〇鎮西八郎為朝琉球に下り給ひしも、此島に渡り給て三年あまり名瀬間切に御坐まし、又佳喜呂麻東の地に居給ふ事とありと申し伝し。島童の口すさびに、／〇大和城の御曹子やたりぬ、石きやあへあきへゆぬ、平安子や石ぬきや右ちへあきゆぬ。／〇子供きやあ、城の五曹子のいもぬな。／倭の「ねんねこ〳〵ねんねがもりはどこへいた」などの類也。御曹子は為朝なりと云伝。不詳。今為朝の子孫と云伝る人島人に多し。是又不詳。[3]」と記されている。坂口徳太郎氏がこの子守歌の意味を伊波普猷氏に聞くと「大和城の為朝は非常の力人にて、左の手もて其大石を安らかにあげたる程の勇者なり、近代無双の力人平安子は其石を右手もてあげたり、子供等泣いたら為朝が来るにより泣くなよ」の意味だと述べたという。[4]なお、この子守歌の「平安子」は、大力で有名であった別の人物の名前ということである。[5]

この『南島雑話』の記述から、少なくとも幕末には、源為朝が奄美大島や加計呂麻島に滞在したことがあるという伝承が成立していたらしいことがわかる。また、「今為朝の子孫と云伝る人島人に多し」という記述から、名越左源太の時代よりかなり前（期間は不明）から為朝伝説が奄美諸島で広まっていたらしいことがうかがえる（「為朝の子孫」を名乗る島人が「多」く存在するようになるまでには、「それなりの年月」を要したものと推定される）。

現在、加計呂麻島の北西端に位置する実久集落には、実久三次郎という人物に関する伝説が伝えられている。[6]源為朝が実久に来て土地の美人と結ばれ、実久三次郎が生まれたという。実久には、実久三次郎を祭る実久三次郎神社がある。

では次に、筆者が実久地区（鹿児島県大島郡瀬戸内町実久）で採集した事例をみてみることにする。

〈事例1〉「源為朝と実久三次郎」

あのお方は、いつの時代かわかりませんけど、源為朝の、子どもなんです。あのお方は、あっちにもこっちにもね、子どもがいっぱい。そういう伝説が、聞いてますけどねえ。その中の一人。で、お墓もちゃんとありますが。神社上がりましたか。じゃ、あそこに書いてあるとおりです。母は、ナベシリですか。もともと実久の（人）。為朝という方が、沖縄にやってきて、それからまた、奄美大島にもやってきて。ちょうど、船が浜着いた時ですね、ナベシリていう人が、なんか昔の芭蕉布ですか、あれを、海の水でこうして、ゆすいでいるところを、なんか見かけたていう話なんですけれどもね。で、昔のことですから、なんか、やっぱり、侍でも、なんか怖がったんじゃないでしょうかなあ。すぐ、しばらくして、さっとあがってしまって、家に戻ってしまった。それから、かなり美人だったでしょうね。為朝は、再度またやってきて、その家を尋ねて行ったとかっていう。で、沖縄から、琉球芝居を持ってきて、人を集めて、そんな機会を得たっていう。一晩合（ひとばんごう）とか、いう、話なんです。実久三次郎。やっぱりあの、人を寄せる、つもりでね（琉球芝居を持ってきた）。再度またやってきて、どうして人を集めんことにはその、そういう機会が得られんていうことで、なんか沖縄芝居を持ってきて、人を集め、そんな機会を得た、とかいう。（二人の子どもが）実久三次郎。

あれは、私はあとで話に聞いたんですが、私の親父が青年団長の時代に、あの、お墓を、ちゃんと建てたいう話なんですが。で、ここには、四十人組（しじゅうにんぐみ）ていってですね、その、ナベシリの親戚、一族でしょうねえ。そういう四十人組っていうもんが、ありましたが、今はもうそんなの、何もありませんけどね。私なんかが、若い頃までは、大変盛んな、祭りでも盛んにやってましたよ。四十人組。私なんかその組合に入ってませんから、ただ四十人組って、みんな、言うもんだから。その子孫が増えましたら、それ（四十人）以上、かもしれませんけど。私なんかやっぱり、その仲間に入ってません。子孫でしょうねえ。[7]

〈事例1〉は、為朝と実久三次郎の母が出会った経緯を語っている。為朝が実久にやってきた時、ナベシリという美人が芭蕉布を海の水でゆすいでいるところを見かけて見初めた。後日、為朝は再度やってきて、琉球芝居で人を集めて機会をつくり、二人の間に実久三次郎が生まれたという。話者の父が青年団長の時代に、実久三次郎の墓を建てたといい、ナベシリの一族が四十人組（しじゅうにんぐみ）という組織を作っていたということであった。「あそこに書いてあるとおりです」と話者が語っている神社の説明板は、神社入口の鳥居の右側に設置されている。「実久三次郎神社由来」と題されたその説明文には、次のような内容が記されている――永万二年（一一六六）源為朝が喜界の小野津港に上陸して美しい娘と夫婦の契りを結び一子を儲けた。為朝は喜界にいては十分な勢力を造ることができないと感じ、小野津神社を造って喜界を離れ大島北部に上陸し、本島を南下して実久に来た。この実久神社には為朝の長子実久三次郎が祭られており、加計呂麻島の旧実久村と鎮西村の名称も為朝にちなんでいる。実久三次郎が宇検の名柄八幡と力比べをした時に用いたと伝えられる石が二基当神社に安置されている。この石に三次郎の手形足形と言われる痕跡があり、三次郎が巨人型の人であったことを物語っている――。なお、この説明文の大半は、昇曙夢氏『大

奄美史』の記述を利用して作成されているようである。[8] ロシア文学者として有名な昇曙夢氏は、明治十一年（一八七八）に加計呂麻島の芝で生まれた。芝は実久のすぐ近くにあることから、昇曙夢氏も小さい頃、これらの伝説を聞いて育ち、『大奄美史』に為朝や三次郎の伝説を比較的詳しく記述したものと思われる。

実久三次郎神社に入って奥に進み、左側の斜面をコンクリートで整地した所に、三次郎と母の墓がある。三次郎の墓の表には「鎮西八郎源為朝公□之子／実久源三次郎公之墓」とあり、三次郎の母の墓の表には「鎮西八郎源為朝公之妻／実久ナベシリカナ之墓」と刻まれている。[9]

〈事例2〉「源為朝と実久三次郎」

どこか、向こう沖縄かどこか行く、時にちょっと、何かのあれで、実久に寄ったら、実久のほら、九月九日にある向こう、相撲取るところがあるでしょう。あっちで、あれしてる時、その娘が、海岸に、何かしに来たかもね。それ見て、その三次郎（為朝の語り違い）が、自分の奥さんにあれしたい。いえば、一夜の子どもじゃや。そしてもう奇麗かったってね、その（娘）。向こう、どっからだったかわからんけど、（三次郎が）石投げた。ほんとに投げたのか、形はあるけどや、指のあれがね。[10]

〈事例3〉「実久三次郎と力石」

あれは、やっぱり、為朝の、子どもで、とっても巨人っていう話もありますけれども、それを表したもんじゃないんでしょうか。あそこに足形と、指の、こう、指を広げたあれ、ありますよね。あの、ほら、ちょっと段を上がっていって、墓標の近くに。えっと、そこには何か書いてありましたよ。まああれも、かなり、大きな人であったという、何を残したんじゃないでしょうか。[11]

〈事例2〉も、〈事例1〉と同様に為朝と実久三次郎の母が出会った経緯を語っている。現在、実久で調査すると、通常はこのような簡略な形で語られる場合が多い。〈事例3〉は、神社に今も置いてある石は、実久三次郎に由来するという語りである。〈事例2〉の末にもこの石のことが語られている。

実久三次郎神社の境内の、三次郎と母の墓の下には、三次郎に由来するという三つの石がコンクリートの台の上に置いてある。向かって左から、足形のある石、手形（指穴）のある石、力比べをした時の石であるという。三次郎は大力の人物であったとも、巨人であったとも語られている。また、昇曙夢氏が「無双の大力で、海上一里を隔てた対岸の西古見との間を大櫂一掻きで渡つたといふので、今に大櫂加那志（うふゆほがなし、加那志は敬称）と崇められ」[12]ていると記しているように、三次郎には「ウフユホガナシ（大櫂加那志、大櫂様）」という別称もある。

筆者が実久で調査中、偶然に、昭和四十九～五十五年まで三次郎神社四代目社守をしていたという奥田保親氏が記したノートとメモを見せてもらう機会を得た。奥田保親氏はすでに亡くなられたそうであるが、遺品整理をしている時、不用品と一緒にノート類が燃やされる直前、それに気付いた方が偶然見つけて保存してこられたそうである。松原武実・高橋一郎両氏が紹介されている奥田保親氏のものというノートは、このノートと同じものと思われる。[13] 奥田氏は熱心に三次郎に関する調査研究を行ったものとみられ、ざら紙のメモの中に「みんなと一所に研究して完成したいと思いますので御協力下さいませ。討論ではない。研究ですから、尋ねて話をききにくる時には心安くどんな事でもきかせて下さ

い」（一部句読点を補った）という記述がみられる。この記述から、集落の人々から種々の話を聞いてまとめようと試みたことがわかる。大変貴重な内容を含んでいるため、重要な一部分を翻刻して紹介しておく（以下、「奥田ノート」と略す）。

○「鎮西八郎源為朝と源三次郎について」[14]

その昔保元々年七月十日崇徳上皇挙兵〔一一六五（原田注・一一五六の誤記）〕に敗れた鎮西八郎為朝は近江国輪田に隠れ傷の手当中捕えられて伊豆の大島に流されたが、間もなく付近の島々を従えて所領とした。所が、為朝は永万元年〔一一六五〕付近の島々を征服する際暴風に遭い奄美大島喜界島沖合に流れていた時、波に漂い乍島影を見つけ一弓を離したら喜界島の石岸に当った。弓を引きぬいたらそこから水が湧き出た。それが現在刈又の遺跡である。為朝は喜界島で二ヶ月位滞在したが志しと違い少いので南下した。途中、西古見港に停泊したら風波が強いので、対岸の実久港に移動淀（碇ヵ）泊した。いかりをおろした場所は現休憩所の海で、とものつなわ（は）長浦満氏宅石垣の中程に大きなひとつ葉の大きな木にしばりつけて、陸と海とを往服（復ヵ）した道は神道と呼ばれて今もあります。ひとつ葉の木は明治四十年頃迄そのまま残っていました。長浦満、長浦治宅には三次郎様の母様が住いされて神屋敷と呼ばれ、母様が手足を洗ったと伝えられているちよつ鉢もが今も残されています。三次郎様の母様は神女といわれる程の美女で一歩も外出されず実久の方々も見かけた事がないと云ふ。話を聞いた為朝は早速広場に土を運ばせ高く盛土し土俵をつくり村人全員に御馳走したり角力や歌踊をさせた。その時神女も一同と輪になって踊り、為朝を歓迎した。広場に土を運ばせた処は現神社墓石の上宗津山にそのまま残っています。今尚残っている広場〔みや〕を深く掘り下げると赤い土ばかり出てきます。盛土ではないといひ切れない点も確にあります。為朝の実久滞在は三ヶ月位との事ですが、為朝と神女の間には子供が出来ていたとの事です。為朝は琉球に風が吹き始めた頃沖縄に出発された。その時に腹の子供が男の子なら源の姓を名乗らせる約束をして旅立ちされたので、実久源三次郎と名前がつけられたとの事です。

この「鎮西八郎源為朝と源三次郎について」の最初あたりは昇曙夢氏『大奄美史』の記述を利用して作成されているようであるが、「西古見港」あたりの記述からは、実久集落の共通の伝承が盛り込まれて記述されているようである。為朝と三次郎の母の出会いの様子や、三次郎の母が住んでいた神屋敷のことなど、興味深い内容となっている。

〈事例4〉「四十人組について」

三次郎は、そりゃもう、何百年前の話ですから。その、親戚が四十人ぐらいあって、四十人組（よんじゅうにんぐみ）ってものが、私なんかの若い頃まで、そういう集まりがありましてね。何か、旧暦の五月五日に、そういう連中が集まって、金の貸し借りとかね、何か色々、一汁一瓶で集まって、そんなことやってましたけどね。田舎は節句はみんな旧暦でやってますからね。そういう機会に、集まってね、金の貸し借りの利子とかそういった、何をね。今はそんなのはもうありませんけどね。わかりませんよ、もう。もう、その時代の方は亡くなりましたから。今の若いもんには継いでませんから。（中略）もう私なんかが若い頃の話ですからね、二十代ぐらいの頃。あれからもう、何十年経ちましたから

ね。私なんかもう、八十五、六もなりましたからね。今頃あんなことありませんからね、誰もね。もう四十人組（しじゅうにんぐみ）も、どうなったかわかりません。[15]

実久集落にはかつて、「四十人組（よんじゅうにんぐみ、しじゅうにんぐみ）」という組織があった。〈事例4〉はその組織外にいた人が「四十人組」をどう見ていたかについての語りである。奥田ノートに「当時の智識人や末孫といわれる方々が中心となって明治十六年五月クジ（ママ）組を結成し、御盆一〇個と財産全部を譲り受けたのがグシ（ママ）組の始まりとなっています」と記されていることから、この組織は最初「グジ組」と称されていたことがわかる。[16]「四十人組（グジ組）」は、明治十六年五月、三次郎の母が日常使っていたとされる御盆十個と三次郎の母方の財産全部を管理するために結成された組織で、当時の知識人や末孫とされる人々が中心となって運営していたということである。大正七年生まれの〈事例4〉の話者の記憶によると、「四十人組」の人たちが旧暦の五月五日の節句に一汁一瓶を持ち寄って集まり、金の貸し借りなどをしていたというが、今はもうなくなっているという。

調査中、実久では、昭和二十、三十年代くらいまでは、ノロや神女たちがオオドネ（フードネ）、コドネという小屋に集まって祭事を行っていたが、その人々が亡くなると自然消滅したという話を聞いた。かつては実久のすべての既婚女性が神女で、ノロを中心とした極秘の神事が行われていたということである。[17]

〈事例5〉「三次郎大祭について」

部落のね、毎年九月九日にね、旧暦の九月九日に、三次郎大祭（さんじろうたいさい）があります。今でも、やります。普通ここらで、相撲取ったり、踊ったり、なんや、そんな。もう今頃は、相撲取るような力士もおりませんしね若いやつも。もうほんの、子どもなんかが小学校生徒なんか、集めて、相撲取らしたりするんだけど。ここのあの、公民館のそばのあの土俵で。もう今は、相撲取るような連中もおりませんしね。[18]

〈事例5〉は、今でも毎年旧暦の九月九日に行われている実久三次郎大祭についての語りである。公民館のそばの土俵で相撲を取ったり余興を出したりして一日中楽しんだそうであるが、今では力士がいなくなったため、小学生を集めて相撲を取らしているということであった。実久集落の人口は、昭和三十年（一九五五）には百六世帯四百五十一名であったが、平成十四年には四十余名と、半世紀で十分の一にまで激減したという。急激な人口の減少により、「四十人組」という管理組織もノロを中心とした神女組織も消滅し、祭りの内容も変容してきていることがわかる。

Ⅱ　第二回大島征伐の伝承

前節では為朝の子とされる実久三次郎をめぐる伝承について、実久での調査をもとに検討したが、本節では第二回大島征伐をめぐる伝承について検討してみることにする。

坂口徳太郎氏は琉球による奄美諸島の征伐には、「第一回大島征伐」、「第二回大島征伐」、「第三回大島征伐」の三回があると述べている。[19]昇曙夢氏も同様に、「第一回大島討伐」、「第二回大島討伐」、「第三回大島討伐」の三回の討伐があると述べている。[20]また、真境名安興氏も、「大

島征伐」、「第二回の大島征伐」、「尚元大島を征す」と記している。[21] これらのような、第一～三回征伐などという呼称は現在では使用されていないようであるが、わかりやすい呼称であるため、便宜的に本稿では使用することにした。第一回大島征伐は一五三七年尚清王の時代、第三回大島征伐は一五七一年尚元王の時代とされ、これらの戦いのことは琉球の正史『中山世鑑』にも記されている。ところが、いわゆる「第二回大島征伐」は琉球の正史に記されていない。しかし、奄美では、種々の伝承から、尚清王の時代に「第二回大島征伐」があったと考えられてきた。

「第二回大島征伐」に関して坂口徳太郎氏は、『芝家代々記』を根拠として、明の嘉靖年中に加計呂麻島の諸鈍の邪悪な兄弟イキヨホノヒョウヤ・ヨミノチキヨと屋喜内間切の名柄八丸が中山王の命に背き、貢進渡琉の船から掠奪したため、諸鈍の兄弟は琉球軍に滅ぼされ、名柄八丸は大島の為宗（芝家の祖）に滅ぼされたと記している。[22] 真偽は不明であるが、諸鈍には、琉球軍に攻められたという二つの伝承がある。一つは邪悪な兄弟イキヨホノヒョウヤ・ヨミノチキヨが征伐されたという伝承、もう一つはナングリモリバラとグリヤバラの闘争として伝承されている。[23] 実際に諸鈍で調査すると、すでに伝承者はほとんどいない状況であった。次に、実際に土地（鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍）で採集した事例を提示しておく。

〈事例6〉「炊いた粟で琉球軍を退散させた話」

粟ちったら、昔は食料だったでしょう。食料やったやつを、相手は武器持って来るもんだからここはなにへ対抗するために、粟を炊いてやったちゅうのは、僕ら聞いてる。粟を炊いて、それをぶっかけてるわけよ。琉球の兵隊のよ。あの、退治しに来た連中とよ、戦ったのはね。（粟を炊いたのは）ここの、その時の海賊連中じゃない。ここの住民よ島の。だけどその知恵を、粟であれしたちゅうのは、もう僕らも聞いてるわけね。ほで、退治して、結局は、槍よりかは粟の方が強かったんじゃないの。（悪い兄弟の話は聞いたことがあるかを聞くと）だったらその兄弟というのは、海賊の頭領のことじゃないか。首領。だから、この二人があの、琉球の品持ってけば、ここで、闇討ちくらってそれを、取るもんだから。だからその兄弟のことじゃないか、海賊海賊ちゅうのは。たぶん海賊だったんじゃないか、ここは、ちゅうのね。噂話で。嫌がるけどね。海賊いうたら、自分らがほら、ここがね、そういうもんちゅうの言われるのが、好かんもんだから皆言わんかったんだろうと思うんだよ。僕なんか、そういうのを聞いたのよ。それで、そこのちゃんと見張り台もあるからな、現に。ここで見張って合図を送って、岬の先に送って、ここから船を、出して。ここの沖通るからね、黒潮の、潮がね。ここで、ぶん取っとったんじゃないか、ちゅうことでね。それを退治しに来た時に、粟でもって対抗したのがこの連中じゃないかちゅうわけよ。（兄弟はファームテに）逃げたんじゃなくて、向こうまで、呼び込んで行ったのよ。だから向こうで、陣地を構えて、粟でぶっかけたちゅうのよね。結局あの、来たのを、追い返したちゅうのは、それ。そういう話が有名なるわけね。（ファームテは別名）倉屋敷。何とかいう、何グスクちゅう地名が付いてるとこあるのよ。そこ、ちょっと下がってるのは。要するに、あそこ、グスクからはね、太平洋が見えるのよ。[24]

〈事例6〉は、諸鈍の首領が、攻めてきた琉球軍をファームテまで呼び込んで陣地を構え、炊いた粟をかけて退散させたという伝承を語って

いる。ここで語られている戦闘時に粟を炊いて攻撃に利用するモチーフは、南西諸島の戦闘譚ではよく聞くもので、興味を引かれる。ナングリモリバラとグリヤバラの闘争譚では、ナングリモリバラが要害地ファームテに高倉を建てて城を構え、琉球軍を追い返したと伝承されていることから、〈事例7〉はナングリモリバラとグリヤバラの闘争譚の一部を語る伝承とみられるが、不詳である。諸鈍における二つの伝承はかなり錯綜しているようである。『鹿児島県の地名』の「諸鈍城跡」の項に「グスク跡。地元では倉屋敷またはファームテという。諸鈍湾の北側にある諸鈍集落の東方の山中で、東に太平洋を見下ろす、標高二四八メートルを最高地点とする山を主体として築かれている。南北八メートル・東西一九メートルの平坦面と、その東に一段下って小さな平坦面があり、曲輪と添曲輪と考えられる。東は海までの急崖で仕切られてあるが、他の面は地続きのままとみられる。伝承によれば琉球王朝の軍勢が上陸して諸鈍で合戦、その際諸鈍の領主兄弟はファームテに避難したという」[25]と記されているように、ファームテは戦闘時にこもるのに便利な要害地であった。諸鈍で調査すると、少なくとも、諸鈍に琉球王朝の軍勢が上陸して合戦し、その際諸鈍の領主が要害地ファームテに避難したという伝承があるのは確かである。それが、邪悪な兄弟イキヨホノヒョウヤ・ヨミノチキヨが征伐された時の伝承なのか、ナングリモリバラとグリヤバラの闘争譚の伝承なのか、あるいはファームテでの攻防がかつて二度あったのかは不詳である。

次に、「第二回大島征伐」で、諸鈍の邪悪な兄弟イキヨホノヒョウヤ・ヨミノチキヨとともに滅ぼされたという屋喜内間切の名柄八丸をめぐる伝承について検討してみる。奄美大島の南西部に位置する焼内湾の南岸にある名柄（鹿児島県大島郡宇検村名柄）は、良港のある地として知られていた。昭和四十年頃まで、周囲に良い漁場のある良港として栄えたが、近年は海水の汚染等で漁獲高が激減したという。

先に見た諸鈍の邪悪な兄弟は琉球軍に滅ぼされたというが、共に中山王の命に背き、貢進渡琉の船から掠奪したという名柄八丸は、大島の為宗（芝家の祖）に滅ぼされたという（『芝家代々記』）。『改訂名瀬市誌1巻歴史編』には「名柄八丸の抗戦については、地元の名柄には、委しく伝承が伝わっている。その旗指物も、伝わっている。名柄八丸は、地元では、「ナガラハチマン様」といっている。八幡という呼称は、この首長が、倭寇出であることを語るものであろう」と記されている。[26]実際に名柄地区で調査すると、名柄八丸に関する伝承は確かに存在していた。しかし、『改訂名瀬市誌1巻歴史編』の記述は、名柄八丸に関する伝承の一面しか述べていないらしいことがわかってきた。名柄地区には、名柄八丸を「ナガラハチマン様」と呼称する人々とは別に、「ナガラハチマル様」と呼称する人々が存在している。次に、その事例を提示する。

〈事例7〉「名柄八丸の最期」

名柄八丸（ながらはちまる）。名柄の人は一般は八幡様（はちまんさま）ちて言ってんですねえ。私なんかは八丸様（はちまるさま）。八に丸。無格社だからね昔のね。無格社だから、村社ではない。個人の、崇拝で、やっている。造ったのはわかりません。昔からじゃない。明治になってからだと思うんですけどね。その由来を話さなきゃわからない。あのね、由来。

本家にね、その八丸様が、琉球から遣われて、琉球王から遣われて、租税の取り立てに、宿をしておったわけよ。その、八丸様は、琉球の、

仕官ですよ。それは時代はわかりません。仕官でね、租税を取り立てに来ておって、そして、租税を取り立てる役目はあったんだけれども、それを滞納しておった。滞納して、そして、どういう遊びをしたか、どういう滞納だかそれはわかりませんけども、滞納しておって、琉球征伐、琉球からね、八丸を征伐に来た。征伐に来て、非常に、弓矢が上手だったもんでね、弓で、矢をみんな、飛んでくる矢をこれつかみょうた。吹き矢ちゅうてね、矢に管を通すわけね。管を通して、その、矢だけが通ってゆく。飛んでくる矢を全部こう、つかみょうたから、征伐できない。吹き矢を作って、通して、胸に。それが征伐ね。[27]

〈事例7〉は、名柄八丸の最期に関する語りである。名柄八丸は琉球王から租税の取り立てにこの地に派遣された役人で、〈事例7〉の話者の本家に宿泊していた。しかし、滞納したため、琉球から征伐に来た。八丸は弓矢が上手で飛んでくる矢をつかんでしまうため、吹き矢で胸を通されて殺された。名柄八丸が宿泊していたことから、〈事例7〉の話者の一族が代々八丸を祭ってきたということであった。〈事例7〉の話者によると、名柄八丸は琉球王から征伐されたが、八丸を征伐した中心人物は大島の人だったと伝承されているという。名柄には、名柄八丸を祭る神社（無格社）があり、名柄の通常の人々は「名柄八幡（ながらはちまん）様」と呼んでいる。一方、〈事例7〉の話者の一族は代々「名柄八丸（ながらはちまる）様」と呼んできたということであった。

Ⅲ　実久三次郎と名柄八丸

興味深いのは、源為朝（一一三九～一一七〇）の子とされる実久三次郎と、琉球国尚清王（一五二七～一五五五年在位）によるいわゆる「第二回大島征伐」で琉球に討伐されたとされる名柄八丸が力比べをしたという伝説が、奄美各地に伝承されている点である。数百年の隔たりのあるこの二人が力比べをしたという伝説がなぜ生まれることになったのであろうか。まず、具体的な事例からみてみることにする。

実久地区で調査すると、次のような話を聞くことができた。

〈事例8〉「実久三次郎と名柄八幡の力比べ」実久

名柄八幡（ながらはちまん）。力比べっていう話も聞いたんですが、まあ、話でしょうけどね。あの石は、名柄の八幡（ながらのはちまん）様が投げたもんがここまで届いたとか、いう話もありますし。三次郎の手の跡であるとかいう、そういう話もありますから。どっちか、昔のことですから。もう、おそらく、七八百年から以上じゃないでしょうか。（名柄は）宇検村。まあどっちも力持ちだったいうことでしょうか。（名柄八幡は）向こうの神社じゃあないですか。やっぱり八幡っていう名前でしょうねえ。ここは、為朝。八幡様って、ここは聞いてますが。行ったこともありませんし。何か二人が力比べをなさったとか、いう話を聞いてます。[28]

〈事例8〉は「名柄八幡」と実久三次郎が力比べをし、名柄八幡が名柄から投げた石が実久まで届いたという語りである。実久出身の〈事例8〉の話者が名柄八丸のことを名柄八幡様と呼んでいるように、通常、実久地区では、三次郎と力比べをした相手を「名柄八幡様」と呼んでいる。

一方の名柄地区では、次のような話を聞くことができた。

〈事例9〉「実久三次郎と名柄八丸の力比べ」名柄

実久三次郎とね、石の投げ合い。伝説があるんです。大きな石ね。瀬戸内の古志という集落の入口にこんな大きな石があるんです。実久三次郎がけってきた。それから、八丸は、実久まで届かんで途中までで落ちたちゅう。けり返したという。久慈。ここの、峠を越えた久慈という所。久慈、その、隣の古志と。古志。久慈じゃなくて私は古志ちゅうて聞いてます。古志と私は聞いてます。実久三次郎の足跡があるちゅうなこと聞いたんですけどね。（古志の石はもう）ない。（実久三次郎と）名柄八丸の力比べ。実久三次郎。[29]

〈事例9〉は実久三次郎と名柄八丸が力比べをし、実久から三次郎が大石をけってきたので名柄八丸もけり返したがけりそこね、大石は実久まで届かないで途中の古志で落ちたという語りである。〈事例9〉は、名柄出身で大正十二年生まれの話者が父親から聞いた話であるという。大石が落ちた場所は古志（こし）と聞いているが、地名が似ているので久慈（くじ）かもしれないということであった。なお、古志（こし）は俗に「くし」といい、近距離に瀬戸内町古志（こし・くし）・宇検村久志（くし）・瀬戸内町久慈（くじ）と三つも同じような地名がある。[30]

この、実久三次郎と名柄八丸の力比べに関して、昇曙夢氏は昭和二十四年に刊行された『大奄美史』に「三次郎に就いてはこの外にも口碑があつて、多（名カ）柄の大親名柄八丸との間に、数里の海を隔てて投げ合つたといふ大きな石が、二人の手足の痕のついたまま今でも実久と名柄との中間に当る久慈の海岸に残つてゐると言はれてゐるが、三次郎と八丸とは時代がかなり離れてゐるから、これは口碑の錯誤であらう。[31]」と述べている。このことから、昇曙夢氏は、「口碑の錯誤」と認識しつつも、二人が投げ合った大石は「久慈の海岸」に残っていると聞いていたことがわかる。実際に久慈（鹿児島県大島郡瀬戸内町久慈）に行って調査すると、次のような話を聞くことができた。

〈事例10〉「実久三次郎と名柄八幡」久慈

実久の三次郎とか、あれが、名柄の方に、大きな石を、こう、投げたら、足でけとばした石が、あそこに転がったとか、いう。足跡の、大きな、足跡のような、石が残ってたんですよね。そこの岬の方、墓の下ですよ。あの石がもう、全くなくなってしまっておるんですよね。飛んできたということ、そんなことは、話を聞いたことがある。あれは、どうなったんかなあ。終戦後、あれ、どっか、石屋さんが割って使ったのかな。あそこの、墓があるんです。（中略）私なんかは昔は、大浜といってあの、花天（けてん）とここの久慈の間に、小さい集落があったんですよね、八、九軒ぐらいの。あそこから、通学して、よく、あの石は毎日見ょうた、です。私、戦地に行ってましたので、その間なくなっていたですね。そりゃもう、一トン近くあったですよね。足跡というのが、ちょっと四十センチぐらいの、大きな、足跡の形でした。名柄に、八幡神社があるんですよね。あそこに、どういう関係か、その、わけがわかりませんが、名柄に投げた石が、八幡様がけとばして、そこの浜に落ちたということだけ、話を聞いたことがあります。三次郎が投げた石が、名柄八幡（ながらはちまん）がけって、ここに落ちた。久慈の浜に落ちた。[32]

〈事例10〉は、実久三次郎が名柄の方に大石を投げ、「名柄八幡様」が足でけとばしたところ、その大石が久慈の浜に落ちたという語りである。〈事例10〉では、現在久慈に住んでいる話者が、名柄にある「八幡

神社」の「八幡様」が石をけとばしたと語っている点に注目したい。久慈の近くにあった大浜という集落で大正六年に生まれたという〈事例10〉の話者は、子どもの頃大浜から久慈まで通学する途中、毎日その大石を見ていたという。その大石は一トン近くあり、四十センチぐらいの大きな足跡の形があったそうである。現在、久慈港の南方の岬に墓地がある。その墓地の下あたりに大石があったそうであるが、話者が戦地から帰ってきた時にはもうなくなっていたという。昇曙夢氏が「数里の海を隔てて投げ合つたといふ大きな石が、二人の手足の痕のついたまま今でも実久と名柄との中間に当る久慈の海岸に残つてゐる」と記した大石は、確かに「久慈の海岸」にあったようである（戦中か終戦直後になくなったらしい）。

先に実久三次郎の伝説を検討した時にみたように、二人が投げ合ったという石は、現在、実久三次郎神社の境内にもある。実久三次郎神社にある石と、「久慈の海岸」にあったという石は別の石のようである。実久三次郎のところで紹介した奥田ノートによると、現在神社にある石は明治三十七年に伊目（久慈のすぐ東にある地）から運んできたものであるという。非常に興味深い内容を含んでいるため、次に実久三次郎神社建立の由来について記してある部分を翻刻して引用する。

○実久三次郎神社建立の由来（奥田ノート）[33]

神社を部落全体の協力を得て建造しオボツ神様を合祀したのを機会に易者を宇検村長良（名柄ヵ）よりお供してお祓い事をさせた。お供に行かした方には（原田注・ここに四人の氏名が記されているが省略）。明治三十七年九月易者が実久港について浜におりたとたんに三次郎様の霊が易者にのり移り三次郎様と母様の埋葬地を教えられ掘って見たら、三次郎様は砂岸石の中にまっすぐ葬られ母様はその上の方に葬られて居られた。両方共神社に移したのが明治三十七年であります。墓石に文字を書かれた人は管鈍出身の［（原文空白）］氏であります。隣りに置いてある手足の跡がある丸い石は易者（に）よって伊目にあるのを若者たちが運んできました。当時神社に昇るには段々畑でした。途中落として一つの石は割れ目を出しました。部落の方は川向ふに集まっていました。石を落とした時にはオボツ山の鉦が鳴り響いて聞こえてきました。易者の話では長良（名柄ヵ）八幡様と実久三次郎様と力比べをして伊目に迄届いたとの事です。

奥田ノートによると、実久三次郎神社は実久集落全体の協力を得て、明治三十七年九月に建造されたという。その時、実久から宇検村名柄にお供四名を派遣して易者を呼び、お祓い事をさせた。易者が実久港について浜に降りたとたん、三次郎の霊が易者に乗り移って三次郎と母の埋葬地を教えたので、掘って神社に移した。神社にある石は、易者の指摘で伊目から実久の若者たちが運んできた。易者の話では、「名柄八幡様」と実久三次郎様と力比べをして伊目にまで届いたとの事であった。ノートに、石を伊目から運ぶ途中落としてしまい、一つの石は割れ目を出したと記されてあるが、現在三つ並べてある石のうち、真ん中の石に確かに割れ目がある。このことから、現在も境内にある石は、明治三十七年に伊目から運ばれてきたものであることがわかる。

この奥田ノートの記述から、名柄八丸と実久三次郎の力比べの話は、明治三十七年頃、「三次郎の霊が乗り移った」名柄の易者（ユタであろう）が語ったのが始まりであった可能性が高いように思われる。実久三

次郎神社建立にかかわったこの名柄の易者は、名柄八丸神社建立にもかかわった可能性がある。次に、名柄で聞いた、名柄八丸神社建立の由来を提示する。

〈事例11〉「名柄八丸神社建立の由来」

その本家に宿をしておったから、遺物があったんです。旗とかてんびん（天秤ヵ）とか釣り鐘。それをね、一つのこういう、昔の、箱があるでしょう。あの箱みたいなのが本家にあってそれに皆残されていた。そしたらね、本家に、色々、災難があって、ここでいう、易ですね。易をさせたら、

「そういう遺物を、八丸様の遺物を、家の中に保管しているから、それが災いして、災難があるんだ」と、易者が言ったそうです。「それを外に出しなさい」ということであの、神社ができたちゅう。私の家は分家ですからね。それは時代はわかりません。そこ出した。あの、今の、神社は、もう二、三回、改造している。そこに、祠を作ってそこに、その遺物を、外に出したわけです。そしたらね、その遺物が、ずうっと減ってるわけ。旗とか太刀とかね、そういった。私なんかの推測ですね。易者がね、それを、見込んで外に出させたろうと。そして、そうしたんじゃないかという話。もう何も残ってない。（中略）まあそういうことで、私の集落のね、祭神でなくて、私たち一族の、祭神として祭ってるんだから、旧の九月九日には、一族の人がお重を作って、お酒を、お神酒をあげたりして、歓談している。旧の九月九日。重陽の節句ですかね。今年なんか、六家族集まった。[34]

〈事例11〉は名柄八丸神社が建立された時の経緯を語っている。〈事例11〉は、〈事例7〉「名柄八丸の最期」を語った話者で、名柄八丸が宿泊していたことから代々八丸を祭ってきたという一族の人である。一族の本家には、かつて、旗や太刀など、名柄八丸の遺物が多数あったという。ある時、本家に色々災難があったため易をさせたら、八丸様の遺物を家の中に保管しているから災難があると易者が言ったため、神社を造ってそこに遺物を入れたという。すると、その遺物が減り続け、今ではもう何も残ってないそうである。〈事例7〉で語られているように、建立は明治になってからだと思われるという。建立以来、二、三回、改造しているそうである。名柄八丸は名柄集落の祭神ではなく、この一族の祭神として祭られているそうで、旧暦九月九日の重陽の節句には、今でも一族の人が集まって歓談しているという。

先に述べたように、奥田ノートの記述から、明治三十七年に実久三次郎神社建立にかかわった易者は、「名柄の易者」であったことがわかる。そして、名柄八丸神社の建立を「易者」が指図したのは、明治の頃と考えられている。名柄八丸神社の建立を指図した易者と実久三次郎神社建立にかかわった易者が同一人物であったかどうかは確認できなかったが、ほぼ同じ時期（明治時代）に両神社が建立されたこと、実久からわざわざ四名を派遣して名柄まで易者を呼んでいること、この名柄の易者に三次郎が乗り移ったとされていることなどから、明治期にかなりの呪力を示した有名な易者（ユタ）が名柄にいたことがわかる。そして、実久三次郎神社の大祭が旧暦の九月九日に行われていることと、名柄八丸神社の私的な祭事が旧暦の九月九日に行われていることも、両社の間に何らかのつながりがあることを示しているようにも思われる（両社の祭事日を「名柄の易者」が「お告げ」によって指定した可能性も考えてみる必要があるかもしれない）。

名柄八丸は、没後、名柄地区に葬られたようである。名柄八丸の墓について、次のような興味深い話を聞くことができた。

〈事例12〉「名柄八丸の墓」

今造ってる、神社、祠社（ほこらしゃ）ね。白アリがついてね、建て直そうと、本家の、次男がやっておるんだけど。その後ろ、川と祠社の間。こう建っとるでしょう上が。その、裏をこう、行かれたか。そこに八丸の、墓がある。珊瑚礁積み重ねた。墓という。[35]

〈事例12〉は、名柄八丸の墓が名柄八丸神社の裏にあるという語りである。これも、代々名柄八丸を祭ってきたという一族の方から聞いた話である。教えてもらったとおり、実際に小高い丘の上にある神社の裏に行ってみると、確かに珊瑚礁を積み重ねた墓らしきものがあった。話者によると、神社に白アリがついて古びてきたので、現在の神社の下にある広い土地に建て直す計画があるということであった。亡くなった後、名柄八丸は名柄集落の小高い丘の上に葬られ、代々名柄八丸を祭ってきたという一族の人々によって手厚く祭られてきたようである。

結　語

以上で、源為朝の子とされる実久三次郎と、琉球国尚清王によるいわゆる「第二回大島征伐」で琉球に討伐されたとされる名柄八丸が力比べをしたという伝説が、なぜ奄美各地に伝承されるようになったかという問題についての筆者なりの論述を終えることとする。

為朝の子とされる実久三次郎の伝説については、加計呂麻島の実久地区に現在も伝承されており、三次郎とその母ナベシリカナを祭る実久三次郎神社がある。一方、名柄八丸の伝説については、宇検村の名柄地区に現在も伝承されており、名柄八丸を祭る名柄八丸神社（一般には名柄八幡神社と呼ばれている）がある。また、いわゆる「第二回大島征伐」の伝説は、宇検村の名柄八丸の伝説のほかに、加計呂麻島の諸鈍（邪悪な兄弟イキヨホノヒョウヤ・ヨミノチキヨの伝説）にも伝承されている。

本稿で検討したように、実久の奥田ノートの記述から、名柄八丸と実久三次郎の力比べの話は、明治三十七年頃、「三次郎の霊が乗り移った」名柄の易者（ユタ）が語ったのが始まりであった可能性が高い。名柄の易者は実久で三次郎と母の遺骨を発見したとされていることから、実久集落の人々から強い信頼を得たものと思われる。それは、名柄八幡様と実久三次郎様とが力比べをして伊目にまで届いたという「名柄の易者」のお告げに対し、実久の人々が海を越えてはるばる伊目までその石を運ぶ人を派遣し、実際に運んできている事実からもうかがえる。また、名柄での調査から、実久三次郎神社建立（明治三十七年）にかかわったこの「名柄の易者」が、名柄八丸神社建立（明治期）にかかわった「易者」であった可能性は高いように思われる。そして、明治期（ほぼ同時期と思われる）に、呪力の高い「易者」のお告げによって実久三次郎神社と名柄八丸神社が建立され、実久三次郎と名柄八丸の力比べの伝説が奄美各地に広まることになったと推定される。実久の人々が伊目まで力比べの「石」を運ぶ人を派遣して実際に運んだ事実も、二人の力比べの伝説を周辺地に広める役目を果たしたであろう。このようにして、実久三次郎と名柄八丸（八幡）の力比べの伝説が奄美各地に広まったと推定される。沖永良部島の「世之主」の伝説にユタが大きな役割を

果たしていることはよく知られているが[36]、加計呂麻島の実久三次郎と奄美大島の名柄八丸の伝説についても、易者（ユタ）が伝承に大きな影響を与えていたことがわかり、注目される。

名柄八丸とその神社の呼称は、実久地区でも久慈地区でも名柄地区でも、通常、「名柄八幡様」「名柄八幡神社」と呼ばれている。実際に、〈事例8〉の実久の話者が名柄八幡神社の八幡様が石を投げたと語っており、〈事例10〉の久慈の話者も名柄の八幡神社の八幡様が石をけとばしたと語っていることから、周辺地では、三次郎と力比べをしたのは名柄八幡神社の八幡様、つまり神様と認識されている可能性が高いように思われる。実久と名柄という海を隔てた長距離を、大石を投げ合った（けり合った）という話は、明らかに虚構の物語世界の話である。その一方の主人公が名柄八幡神社の八幡様という神様だと考えられても全く違和感はなく、むしろ物語としては受け入れやすい。ハチマル（八丸）とハチマン（八幡）という音の共通性も、名柄八丸が周辺地で名柄八幡と呼称されることになった理由の一つとみてよいであろう。また、現在の語り手たちのほとんどは、名柄八丸が大島征伐で討伐されたという伝承を持つ人物であることを知らないようであった。

筆者の名柄での調査により、『改訂名瀬市誌1巻歴史編』にある「名柄八丸は、地元では、「ナガラハチマン様」といっている。八幡という呼称は、この首長が、倭寇出であることを語るものであろう」[37]という記述は、本稿で「ナガラハチマル様」を祭る一族の伝承を検討したように、名柄地区の伝承の一面を語っているにすぎないことがわかってきた。また、「八幡」という呼称は、必ずしも「倭寇」には結びつかない。周辺地域で調査すると、「名柄八幡」に対する現在の人々の認識は、実久三次郎と大石を投げ合ったという伝説がある「名柄八幡神社の八幡様（神様）」というものが多い。おそらく、「名柄八幡」という呼称は、明治期に名柄「八丸」神社（音の共通性から周辺地では名柄「八幡」神社と認識されている）が建立されてから、「名柄の易者」の活躍と相まって急速に広まったものと推定される。今後、名柄地区の名柄八丸の伝承について検討する場合には、「ナガラハチマン（名柄八幡）」の伝承（近隣地の間接的伝承）と、「ナガラハチマル（名柄八丸）」の伝承（八丸を祭る一族の側からの伝承）の両面から総合的に考察する必要があるように思われる。

南西諸島における源為朝をめぐる伝説や、数次にわたるとされる琉球国の大島征伐の伝説に関しては、未解明の部分が多い。本稿で検討できなかった諸問題の解明は、今後の課題としたい。

〈注〉

〔本稿における諸資料よりの引用文中、旧漢字・異体字は原則として通行の字体に改めた。〕

（1）伊波普猷氏他編『琉球史料叢書　第五』（井上書房・一九六二）、一六頁。

（2）拙稿「奥間大親と察度王―琉球王朝始祖伝説をめぐって―」（福田晃氏編『伝承文化の展望―日本の民俗・古典・芸能―』三弥井書店・二〇〇三、所収）、参照。

（3）国分直一・恵良宏氏校注『南島雑話2』（平凡社・一九八四）、一五一～一五二頁。

（4）（5）坂口徳太郎氏『奄美大島史』（三州堂書店・一九二一）、八

一頁。

(6) 実久三次郎をめぐる伝承に関しては、高橋一郎氏による詳しい報告がある。高橋一郎氏「異人を祀るシマ」(『海原の平家伝承　奄美説話の原像』三弥井書店・一九九八、所収)・「「道の島」の源為朝―その言説の行方―」(福田晃氏編『伝承文化の展望―日本の民俗・古典・芸能―』三弥井書店・二〇〇三、所収)。

(7) 話者は鹿児島県大島郡瀬戸内町実久の宮原博二さん(T7・9・1)。平成十四年(二〇〇二)十二月十四日・原田調査、採集稿。

(8) 昇曙夢氏『大奄美史』(奄美社・一九四九)、九〇～九一頁。

(9) 茂野幽考氏『奄美大島民族誌』(岡書院・一九二七)の三三八～三三九頁に「鎮西八郎源為朝親王之子」と墓石に刻してあると記してあることから、昭和二年頃までは墓石一行目に「鎮西八郎源為朝親王之子」と刻してあったことがわかる。その後、「親王」部分を削って「公」と再刻したらしい。現在の墓石の一行目には、「為朝」と「之子」の間の二字分を削り、一字目に「公」と再刻した痕跡がうかがえる。また、二行目の「実久源三次郎公之墓」の「公」部分にも一度削って「公」と再刻した痕跡がある(元の字は不明)。

(10) 話者は鹿児島県大島郡瀬戸内町実久の屋芳子さん(T15・4・13)。平成十四年(二〇〇二)十二月十四日・原田調査、採集稿。

(11) 話者は注7の宮原博二さん。平成十四年(二〇〇二)十二月十四日・原田調査、採集稿。

(12) 注8の昇曙夢氏『大奄美史』、八五頁。

(13) 松原武実・高橋一郎氏『南日本文化研究所叢書24　加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧実久村編)』(鹿児島短期大学付属南日本文化研究所・一九九八)、注6の高橋一郎氏「「道の島」の源為朝」、一一八～一一九頁。

(14) 奥田保親氏のノート。ルーズリーフノートの一枚を表紙とし、「五五年二月／神社の由来／研究　奥田」と黒のマジックインキで横書きされている。一枚目以降は黒のボールペンで縦書きされている。全ページとも裏は白紙。

(15) 話者は注7の宮原博二さん。平成十四年(二〇〇二)十二月十四日・原田調査、採集稿。

(16) 山下欣一氏「ノロとユタ」(鹿児島民俗学会「民俗研究4号　加計呂麻の民俗」一九六九)、注13の松原武実・高橋一郎氏『加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧実久村編)』。

(17) 『鹿児島県の地名』(平凡社・一九九八)の「実久村」の項、九〇九頁。

(18) 話者は注7の宮原博二さん。平成十四年(二〇〇二)十二月十四日・原田調査、採集稿。

(19) 注4の坂口徳太郎氏『奄美大島史』、一八五～一九二頁。

(20) 注8の昇曙夢氏『大奄美史』、一四〇～一五一頁。

(21) 真境名安興氏『沖縄一千年史』(『真境名安興全集　第一巻』ロマン書房本店・一九九三)、一四八～一六一頁。

(22) 注4の坂口徳太郎氏『奄美大島史』、一八八～一八九頁。

(23) 高橋一郎氏「語り継ぐ琉球と大和」(『海原の平家伝承　奄美説話の原像』三弥井書店・一九九八、所収)、松原武実氏『南日本文化研究所叢書25　加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧鎮西村編)』(鹿児

島短期大学付属南日本文化研究所・一九九九）・「14諸鈍」の項。

(24) 話者は鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍の中林生長さん（S25・8・1）。平成十四年（二〇〇二）十二月十四日・原田調査、採集稿。

(25) 注17の『鹿児島県の地名』の「諸鈍城跡」の項、九〇五頁。

(26) 『改訂名瀬市誌1巻歴史編』（名瀬市役所・一九九六）、二四八～二四九頁。

(27) 話者は鹿児島県大島郡宇検村名柄の幸本尚照さん（T12・6・19）。平成十四年（二〇〇二）十二月十六日・原田調査、採集稿。

(28) 話者は注7の宮原博二さん。平成十四年（二〇〇二）十二月十四日・原田調査、採集稿。

(29) 話者は注27の幸本尚照さん。平成十四年（二〇〇二）十二月十六日・原田調査、採集稿。

(30) 『鹿児島県地名大辞典』（角川書店・一九八三）の「古志」の項、二八九頁。

(31) 注8の昇曙夢氏『大奄美史』、八五頁。

(32) 話者は鹿児島県大島郡瀬戸内町久慈の元田永次さん（T6・9・10）。平成十四年（二〇〇二）十二月十六日・原田調査、採集稿。

(33) 注14の奥田保親氏のノートによる。引用にあたり一部句読点を補い、注記は丸括弧でくくった。なお、原文の丸括弧は〔　〕に置き換えた。

(34)(35) 話者は注27の幸本尚照さん。平成十四年（二〇〇二）十二月十六日・原田調査、採集稿。

(36) 拙稿「沖永良部島の世之主伝説―琉球王朝関連伝説をめぐって―」（「人文科学論叢第1巻」二〇〇三・三）、参照。

(37) 注26の『改訂名瀬市誌1巻歴史編』、二四八～二四九頁。

（二〇〇三年十一月五日受理）